大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『女子大文学国文篇』最終号に寄せて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹下, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/2576

『女子大文学　国文篇』最終号に寄せて

竹下　豊

平成十七年四月一日、大阪女子大学・大阪府立大学・大阪府立看護大学の大阪府立三大学を統合した公立大学法人大阪府立大学が発足する。それにともない、大阪女子大学は平成十六年度の新入生を最後に募集停止となった。本学の前身、大阪府女子専門学校が創立されたのは大正十三年（一九二四）二月二日であるから、ちょうど創立八〇周年の記念の年に、最後の新入生を迎えることになったのである。時代の流れとはいいながら、この間の統合問題に深く関わった者のひとりとして、深い感慨を禁じえない。

新しい大阪府立大学の発足にともない、大阪女子大学の教員の身分も新大学に移行し、大阪女子大学の教員を兼ねる形になる。したがって、『女子大文学　国文篇』もこの第五十六号をもって最終号となる。『女子大文学　国文篇』の基となった『女子大文学』第一号が発行されたのは昭和二十六年（一九五一）三月三十一日、学制改革により昭和二十四年四月に四年生制大学に移行してから二年目が終わろうとする時であった。その第一号に「発刊の辞」を寄せた当時の平林治徳学長は、

「女子大文学」が漸く生れました。さゝやかなものですが私たちとしては感無量といふところです。

という感慨からはじめて、旧女専時代から研究雑誌発行の必要性を認め、「国文国史」「家政理学」の二つの雑誌を数年間発行したが、戦争のため廃刊とせざるをえなかった事情を振返っている。そして、近時の「各地の学界や各大学の出版は夥し」いことに触れ、

これらの機関雑誌により、教授学生の発表意欲を刺戟するのみならず、大学使命の一つ、ユニヴァーシチ・エックステンションの一助ともなり、学問の進歩に益することは少くないでせう。われ〳〵の「女子大文学」も驥尾に附して少しでもお役に立ちたいと思ふのですが、貧弱なもので恥しい次第です。唯将来、学を愛する人士の協力と援助とにより一人前に成育することを心か

ら願って発刊の辞と致します。

と結んでいる。謙遜を含んだ平林元学長の辞に、大学の紀要の果たすべき役割は尽きていると思う。

この『女子大文学』第一号は、「編集後記」によれば、国文科英文科関係者（当時は学芸学部国文学科と英文学科）が集まって創刊されたもので、大阪女子大学文学会の発行となっており、国文学科の教員二名、英文学科の教員三名の論文が掲載されている。そして、この『女子大文学』が学科ごとの紀要となり、『女子大文学　国文篇』の誌名で最初に発行されたのが、昭和三十年（一九五五）三月の『女子大文学　国文篇』第七号（号数は『女子大文学』からの通し）である。同誌には玉上琢彌「源氏物語の読者―物語音読論―」など三編の論文と昭和二十八・二十九年度の卒業論文要旨抄が収められている。以後、平成十一年（一九九九）四月に、大阪女子大学の宿願であった文科系（人文社会学部）と理科系（理学部）の二学部への改組が実現し、国文学科が人文学科日本語日本文学専攻となった際も、発行所を国文学研究室から日本語日本文学研究室に変えたのみで、誌名は変更することなく、今日に至っている。この間、『女子大文学　国文篇』は、先輩の諸先生方の学識と御尽力、「学を愛する人士の協力と援助」により、一人前以上に成長し、学界でも評価されてきたと思っているが、この度の統合により本号が最終号となるのは、まことに残念である。

現在の人文学科日本語日本文学専攻は、新大阪府立大学においては、人間社会学部言語文化学科日本言語文化学コース、大学院は言語文化学専攻日本言語文化学分野となり、現在の大阪女子大学の教員に大阪府立大学の教員一名を加えて、再出発することになっている。言語文化学科は、日本言語文化学、英米言語文化学、言語情報学の三コース（分野）で構成されるが、コース（分野）ごとに紀要を発行することが決まっている。新しい日本言語文化学コースの紀要の名称は未決定であるが、名称は変わっても、『女子大文学　国文篇』の歴史と伝統、外部の評価をそのまま維持、継承してくのが私たちの責務であろう。

最近、理科系的思考が人文科学系にも及び、レフェリー制の学会誌などに掲載された論文以外は、論文として評価しないというような風潮もある。しかし、紀要には紀要の果たすべき役割がある。また、どの雑誌に掲載されようといい論文はいいのであり、貴重な資料は貴重なのだから、新しい紀要にも学界を裨益するような論文や資料などを発表できるよう、研究室一同、努力していきたいと思っている。『女子大文学　国文篇』と同様、新しい紀要にも大方の御支援をお願いして、「終刊の辞」の結びとしたい。